

樺太（サハリン）ソ連参戦の艦砲射撃を見た 大越幸伍

当時私は小学校2年生で八歳だった。私の父は青森県津軽で大工をしていたが炭鉱夫の仕事で私がまだ乳飲み子の時南樺太（サハリン）にわたった。

渡った先は国境に近い日本海側の塔路町というところであつた。

当時、南樺太は日露戦争の戦利品で日本領であつた。南樺太は石炭が取れることから石炭ブームで収入も格段に良かったらしい。私が四歳の時に日米開戦があり、石炭はいくらでも必要な軍需品であつたらしい。私が六歳の時、軍命令で父は内地（本州茨城県）に労働者として軍需工場に徴用させられ、樺太には祖母、母、2歳上の姉、9歳の兄と弟二人、私と7人家族が残されたのである。私が8歳の夏、近所のおじさんが山に掘ってある「防空壕に入れ」と指令があり家族ぐるみ移動した。中は暗く、悪臭がして苦しかった。赤ちゃんが泣くと厳しく咎められ母は泣いていた。夜私は隠れて時々外に出た。

何日かして移動と命令が出た。しかも夜の移動だった。祖母、母、11歳の姉、9歳の兄、8歳の僕、4歳と3歳の弟の7人が徒歩で夜移動するのである。日中は頻繁に飛行機の攻撃があり、かくれているのである。食べるものも無く、水も無く幼い子供を抱え、夜の逃避行はどんなに母はつらかったろう。私もいつも眠く、泣いていた。と記憶している。

行き先は日本に近い港を目指したと思うが、途中、私は母とはぐれてしまった。その時「退避と退避」と号令があり私は小高い山の中腹の草藪に逃げ込んだ。ここからはかすかに海が見え、花火のような艦砲射撃を見た。後年知ったのだが、まさに8月9日のソ連参戦の艦砲射撃だったのである。それから終戦（敗戦）までの6日間の夜間の逃避行中は死体、火災、飢餓、の中を歩いた。白い着物を着ていた人のそばに座ったら、それは死体にたかるウジ虫だった。今でも飛行機の音を聞くと思い出す。母、祖母がすでに故人となって久しいが今でも思い出す度に自然と涙がでる。

子供が小さくてその場で動けなくなって、かえって助かったのかも知れない。元気な大人は船で逃げたが皆船は沈められたと聞いた。それから2年後やっと日本に引き揚げてきた。私の当年79歳、残り人生は平和の願いのみである。